佐久市埋蔵文化財報告書　第193集

埋蔵文化財発掘調査報告書

—長野県佐久市長土呂の古代集落調査—

周防畑遺跡群　南下北原遺跡

2011.3

丸五不動産株式会社
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財報告書　第193集

埋蔵文化財発掘調査報告書

—長野県佐久市長土呂の古代集落調査—

周防畑遺跡群　南下北原遺跡

2011.3

丸五不動産株式会社
佐久市教育委員会

H7－20「刑部仁丸」
墨書土器椀（高台欠損、80％縮小）

検出－5「貞観永寶（870年）」
（150％拡大）

南下北原遺跡　報告書の概要

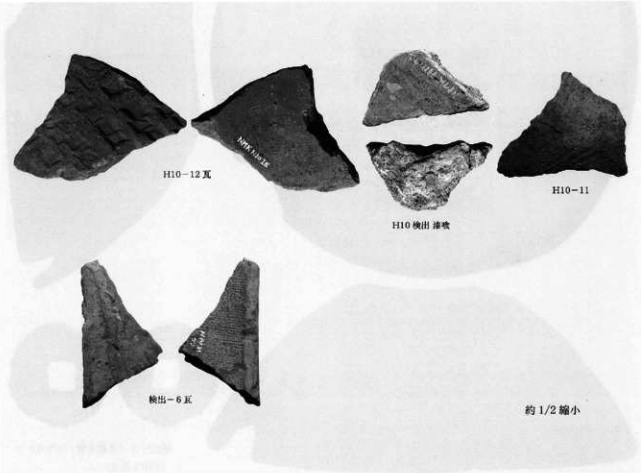
8世紀中頃（奈良時代後半）住居址　3棟（H8・H10・H11）
8世紀末～9世紀初頭頃（平安時代初頭）住居址　1棟（H2）
9世紀前半頃住居址　2棟（H4・H9）
9世紀後半頃住居址　3棟（H1・H7・H12）
10世紀後半～11世紀前半の住居址　2棟（H3・H6）

奈良の中頃から平安の中頃までの集落であろうことが判明した。部分的あるため密度については測り知れない。今後の調査が期待される。

H7号住居址から正位に「仁丸、十」1カ所、「刑部仁丸」2カ所が逆位に書いてある墨書土器椀が出土した。また皇朝十二銭の「貞観永寶」が検出面から出土している。

佐久郡の妙楽寺が定額寺（官寺）に任ぜられたのは貞観8年（866）である。墨書土器の椀年代が9世紀後半とみられ、検出面ではあるが皇朝十二銭の「貞観永寶」(870)が出土している。H10からは布目の平瓦、検出では布目の丸瓦があり、この地あたりは佐久郡衙関連、ことに隣接地から古代瓦が出土する事から定額寺関連の推定地のひとつとなっている。本調査で人名の墨書土器、布目瓦・皇朝十二銭の出土により、定額寺の有力候補地といえるであろう。

巻頭図版一

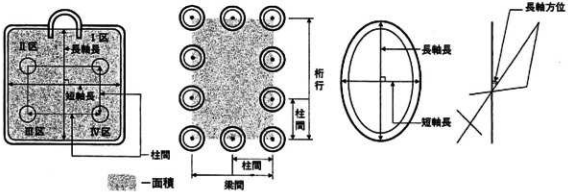


例　言

1．本書は佐久市長土呂の丸五不動産株式会社の宅地造成事業に伴う発掘調査報告書である。
2．調査原因者　丸五不動産株式会社
3．調査主体者　佐久市教育委員会文化財課
4．遺跡名および所在地
　　周防畑遺跡群　南下北原遺跡（NMK）　　佐久市長土呂字南下北原９９６－１他
5．調査面積　１，２９６㎡
6．発掘調査担当は出澤　力、報告書執筆は森泉かよ子が行った。
7．本書及び本遺跡の出土遺物の資料は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

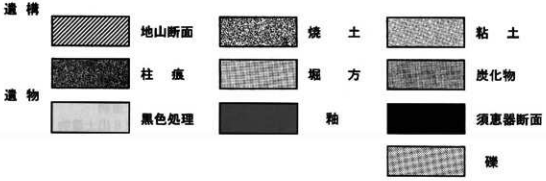
凡　例

1．遺構の略号は以下の通りである。
　　竪穴住居址－H　竪穴状遺構－Ta　土坑―D　ピット―P　溝址―M
2．挿図の縮尺は原則として以下の通りである。
　　遺構―１/80　　遺物―1/４　　但し、鉄製品・骨－１/２
3．遺構の海抜標高は各遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」とした。
4．土層の色調は2005年版『新版　標準土色帖』に基づいて示した。
5．写真図版中の遺物番号と挿図の遺物番号は同一である。図版中の縮尺はほぼ挿図と同じである。
6．遺構の計測は下図に示した測定値である。
　　竪穴住居の面積は床面積で、長軸長×短軸長である。
　　壁残高は最大長である。
　　長軸長と短軸長の差が１割を越えたものを長方形とした。



住居址　　掘立柱建物址　　土　坑　　長軸方位

7．遺物一覧表の（　）は推定値、〈　〉残存値、－は測定不可能であることを示す。
9．本報告書挿図中のスクリーントーンは以下のことを示す。



目　　次

巻頭図版
報告書の概要
例　言・凡　例
目　次
第Ⅰ章　発掘調査の概要 …… 1
　第1節　調査の経緯と経過 …… 1
　第2節　調査組織 …… 2
　第3節　調査日誌 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 3
　第1節　自然環境 …… 3
　第2節　歴史的環境 …… 4
　第3節　基本層序 …… 4
第Ⅲ章　遺構と遺物 …… 7
　第1節　竪穴住居址 …… 7
　第2節　竪穴状遺構 …… 20
　第3節　土坑 …… 20
　第4節　溝址 …… 21
　第5節　単独ピット …… 21
　第6節　検出遺物 …… 21
第Ⅳ章　まとめ …… 22
遺構一覧表 …… 23
遺物一覧表 …… 24
写真図版 …… 29
報告書抄録

挿図目次

第1図　遺跡の位置および周辺遺跡図（1：20,000） …… 1
第2図　南下北原遺跡遺構配置図（1：2,000） …… 3
第3図　南下北原遺跡全体図（1：500） …… 5
第4図　H1号住居址 …… 7
第5図　H2号住居址 …… 8
第6図　H3号住居址 …… 9
第7図　H4号住居址 …… 9
第8図　H5号住居址 …… 10
第9図　H6号住居址 …… 11
第10図　H7号住居址(1) …… 13
第11図　H7号住居址(2) …… 14
第12図　H8号住居址(1) …… 15
第13図　H8号住居址(2) …… 16
第14図　H9号住居址 …… 17
第15図　H10号住居址 …… 18
第16図　H11号住居址 …… 19
第17図　H12号住居址 …… 19
第18図　竪穴状遺構 …… 20
第19図　土坑 …… 20
第20図　溝址 …… 21
第21図　検出遺物 …… 22

付表目次

第1表　南下北原遺跡遺構一覧表
第2表　H1号住居址出土遺物一覧表
第3表　H2号住居址出土遺物一覧表
第4表　H3号住居址出土遺物一覧表
第5表　H4号住居址出土遺物一覧表
第6表　H5号住居址出土遺物一覧表
第7表　H6号住居址出土遺物一覧表
第8表　H7号住居址出土遺物一覧表
第9表　H8号住居址出土遺物一覧表
第10表　H9号住居址出土遺物一覧表
第11表　H10号住居址出土遺物一覧表
第12表　H11号住居址出土遺物一覧表
第13表　土坑出土遺物一覧表
第14表　M1号溝址出土遺物一覧
第15表　M2号溝址出土遺物一覧
第16表　検出出土遺物一覧表

図版目次

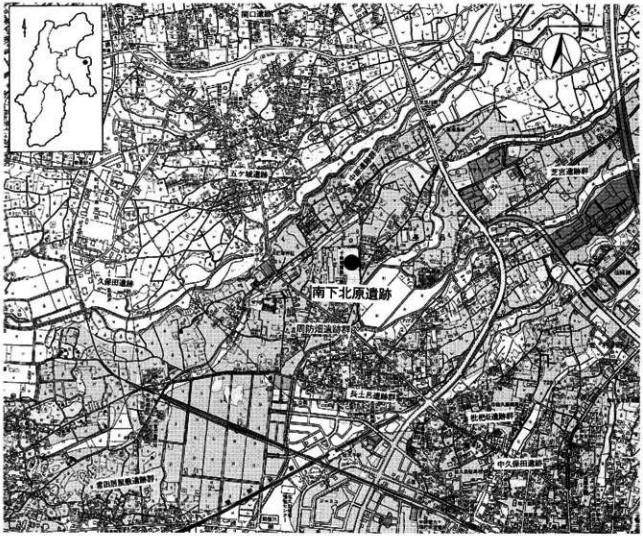
巻頭図版一　「刑部仁丸」墨書土器・貞観永寶
巻頭図版二　瓦他
図版一　H1～H3住居址
図版二　H3～H6住居址
図版三　H6～H7住居址
図版四　H7～H9住居址
図版五　H10～H11住居址
図版六　H12・竪穴状遺構・D1・M1
図版七　M2・M3・A～C地点全景
図版八　H1～H6出土遺物
図版九　H7出土遺物
図版十　H7・H8出土遺物
図版十一　H8～H11・D・M・検出出土遺物

第Ⅰ章　発掘調査の概要

第１節　調査の経緯と経過

対象地は、周防畑遺跡群の所在する台地にあって、田切り地形の帯状台地上にある。東側では田切りの帯状低地に面し、台地は北から南に傾斜している。北側は削平、南は盛り土をして、グランドとして利用されていた。隣接する南の工場造成時の排土から古代寺院に関連すると推測される「川原寺式」の古代瓦が出土しているところである。今回、丸五不動産株式会社により宅地造成事業が計画され、平成２０年度の試掘調査で、遺構遺物が検出されている。本調査は道路部分について、発掘調査が行なわれた。

遺　跡　名　南下北原（みなみしもきたはら）遺跡　　略号　ＮＭＫ
所　在　地　佐久市長土呂字南下北原９９６－１他
調査委託者　丸五不動産株式会社
開発事業名　宅地造成事業
発掘調査期間　平成２１年８月６日～８月２６日
調査面積　１，２９６㎡
調査担当者　出澤　力



第１図　遺跡の位置および周辺遺跡図（１：20,000）

第2節　調査組織

平成21年度（2009）、平成22年度（2010）

教　育　長　木内　清（平成21年6月退職）土屋盛夫（平成21年7月～）
社会教育部長　内藤孝徳（平成21年4月～6月）工藤秀康（平成21年7月～）
社会教育部次長　金澤英人（平成21年4月～6月）
文化財課長　森角吉晴
文化財調査係長　三石宗一
文化財調査係　林　幸彦　並木節子　須藤隆司　小林眞寿　羽毛田卓也　冨沢一明
上原　学　出澤　力　神津　格（平成21年10月）井出泰章（平成21年11月～）
調査担当者　佐々木宗昭　森泉かよ子
調査副担当者　堺　益子　武者幸彦
調　査　員
甘利隆雄　安藤孝司　飯森成英　岡村千代美　小井戸秀元　加藤信一　風間　敏
川瀬祥太　小島　真　小林百合子　小山　功　坂井一夫　菊池喜重　滝沢三男
土屋武士　中島フクジ　日向昭次　細萱ミスズ　百瀬秋男　山田英輝　依田三男
横尾敏雄　油井満芳　渡辺久美子　渡辺　学
図面修正・遺物実測・トレース・編集
岡村千代美　狩野小百合　上山貴恵　加藤ひろ美　小林百合子　清水律子　堺　益子
田中久子　広瀬利恵子　細萱ミスズ　小幡弘子　細谷秀子　依田好行　柳沢亜矢子
柳沢孝子

第3節　調査日誌

平成21年度

8月6日　重機を入れ、調査部分の耕土除去作業を行う。
調査区に基準点基準線を設定する。
本日より調査員を入れ、発掘調査を開始する。
A地点より遺構検出作業。H1を検出。
17日　B地点検出作業。H5の調査をする。
18日　E地点検出。H7の調査をする。H7より「刑部仁丸」墨書土器出土。
19日　C地点、H9調査。
21日　D地点、H10調査。
26日　現場作業終了。
室内にて土器洗浄、注記作業を行う。

平成22年度

5月21日　室内にて整理作業を再開。土器接合、
石膏復元、図面修正を行う。
遺物実測、遺構図・遺物のトレース、
版下作成、遺物写真撮影、
報告書割付、一覧表作成、原稿執筆
と報告書作成作業を行う。
3月　報告書刊行。

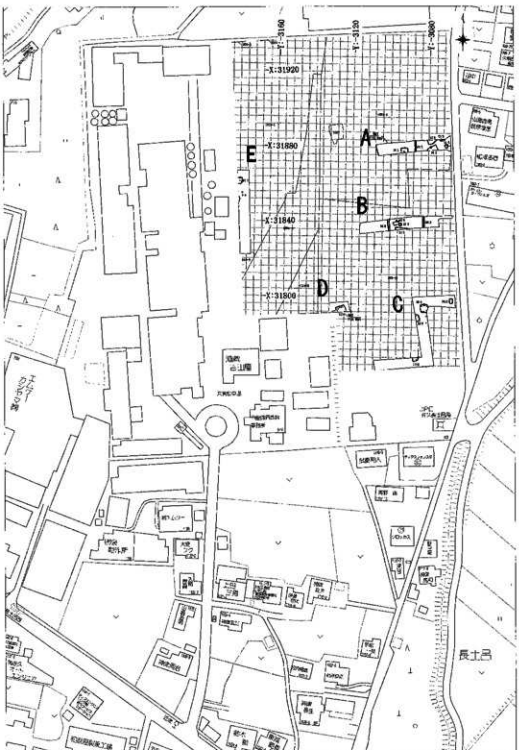
遺構検出風景

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　自然環境

本調査地点は佐久市の北部、浅間山麓の岩村田台地に位置し、標高717m前後を測る。この付近の地層はすべて浅間火山の噴出物によって構成され、基盤の最下底部が第一次黒斑火山の大熱泥流（塚原泥流）の黒色集塊岩である。その上部に、黒斑火山の発達過程に噴出した多量の火山灰・火山弾などの湖成堆積物（水平互層を繰返す湯川層）が重なっている。その上部に浅間火山噴出物である浅間第一軽石流（Ｐ１）が厚く堆積しているところである。

北側は浅間山から南西にかけて細長い台地となっている。浸食されやすい第一軽石流の火山灰が流されて「田切り地形」となっている。本調査遺跡も第一軽石流が浸食されて作り出した「田切り地形」の台地上にある。



第２図　南下北原遺跡遺構配置図（１：2,000）

第２節　歴史的環境

本調査地点では、縄文時代の土器片があるが、住居址は認められない。弥生時代の遺構遺物はないが、弥生後期の集落と墓域が１kmほど南の台地先端部に展開している。周防畑遺跡Ｂ、宮の前遺跡、西近津遺跡群がある。ことに高速道路下の西近津遺跡群では国内最大級となる18×9.5mの長方形の竪穴住居址が検出され、床面積は46坪におよぶという。これほどの大型住居を建築できる勢力をもつ集団が佐久に形成されるに至ったのである。

古墳時代の初頭は、本遺跡の南、新幹線佐久平駅付近の周防畑遺跡群辻の前遺跡にある。箱清水土器の特徴を備えた嗣部球嗣形の土器がみられ、Ｓ字口縁の台付甕を伴うことから古墳時代前期へと移ってゆく。隣接の下伯母塚遺跡のＨ８からは銅鏃が球嗣形の弥生後期末の土器群ともに出土している。

古墳後期～奈良時代の遺跡は現在流通団地となっている聖原遺跡があり、馬具、八稜鏡、金銅製鈴、石製印「伯万私印」、緑釉陶器、皇朝十二銭などが出土している。

本調査地点南の工場建設の際に「川原寺式」とみられる古代瓦も出土している。これらから、古東山道、令制東山道、定額寺、牧、駅など官衙的性格の強い遺跡が考えられている地点である。

中世は岩村田市街の東に大井城跡があり、中世佐久の北の領主であった大井氏の居城とされている。南の黒岩城跡が発掘調査され、54棟の竪穴状遺構・掘立・土坑などからは15・16世紀の遺物を出土している。大井城跡の400mほど南の下信濃石遺跡では、大井氏の氏寺である龍雲寺の一部が調査されている。「大井」の墨書・刻書がここ長土呂地籍から多く出土し、大井の発祥の地とされている。

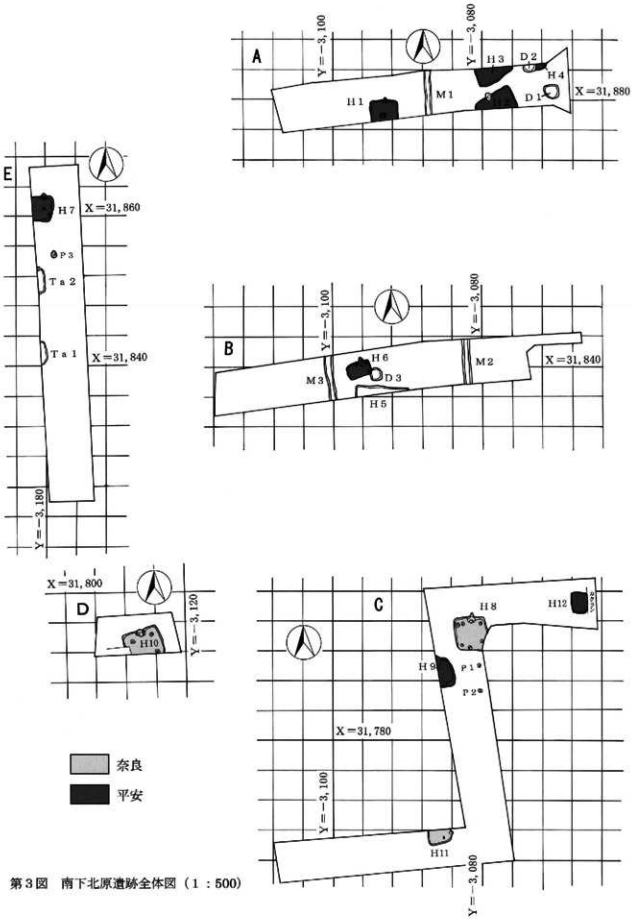
第３節　基本層序

この付近の地層はすべて浅間火山の噴出物によって構成され、基盤の最下底部が、第一次黒斑火山大爆発の山体破壊の大熱泥流（塚原泥流）である。湯川沿岸に点々と堆積し、黒色集塊岩の頂上部が姿を残している（３万年前ほど前）。その上部に黒斑火山の発達過程に噴出した多量な火山灰砂礫火山弾などの湖成堆積物の湯川層が重なっている。

塚原泥流発生後、仏岩火山活動があって、しばらく火山活動の休止期があり、その後２回の軽石流の噴出があった。最初の噴出物を第一軽石流（１万３千年前）、後から噴出したものを第二軽石流という。浅間山南麓に、広く展開した軽石流は、塚原泥流の地域に達すると、西と南に分かれ、南にむかった軽石流は湯川の谷を埋めた。（1988.『佐久市志　自然編』P83、1986白倉盛男『大井城跡』）

本遺跡は浅間第一軽石流に構築している。

E地点（南より）



第3図　南下北原遺跡全体図（1：500）

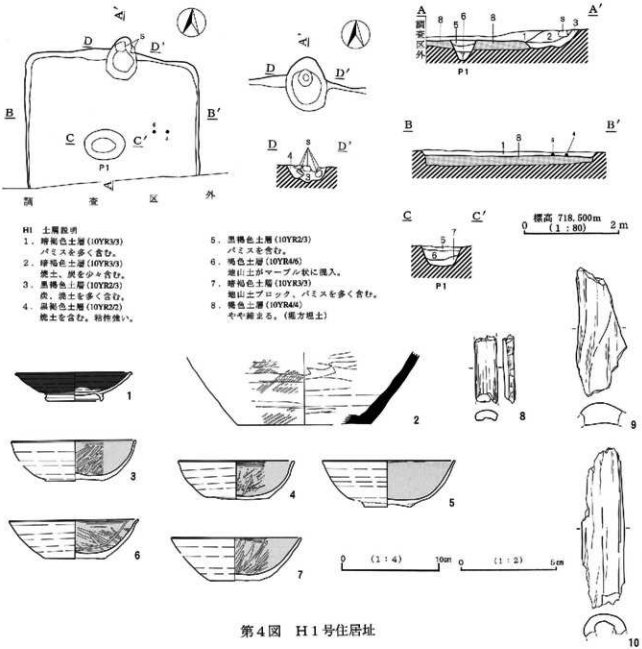
第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　竪穴住居址

１）Ｈ１号住居址

Ａトレンチで検出され、南壁は調査区域外である。南北（2.56）m、東西3.52mの方形基調の住居址である。壁は６～23cmを測る。カマドは北壁にあり火床と煙道の礫がのこる。カマド方位はＮ－３°－Ｗを指す。主柱穴は検出されていない。床面中央に床下土坑とみられる楕円形で84×63cm、深さ42cmのピットがある。

出土遺物は灰釉陶器・須恵器・土師器、骨が出土している。灰釉陶器は皿で釉薬が漬け掛けされる。高台は貼付され、三日月型を呈す。須恵器は四耳壺の底部であろうか外面に叩き目を残し、横ナデさ



第４図　Ｈ１号住居址

れる。実測できないが須恵器杯の口縁部片が１点ある。土師器甕はロクロ甕があり、外面下部がヘラ削りされている。小型のロクロ甕片もある。実測資料には土師器杯がある。いずれも黒色処理され、７の杯のみがミガキが丁寧になされている。４・６は雑なミガキの後、十字に暗文が施される。７の杯は底部周辺、底部がヘラ削りされている。３の杯の底部は薄いが他は厚い。５の器肉は薄く、底径が4.5cmと小さく（他は６cm前後）、底部のみが貼り付けらる「底部柱状づくり」のものであろう。

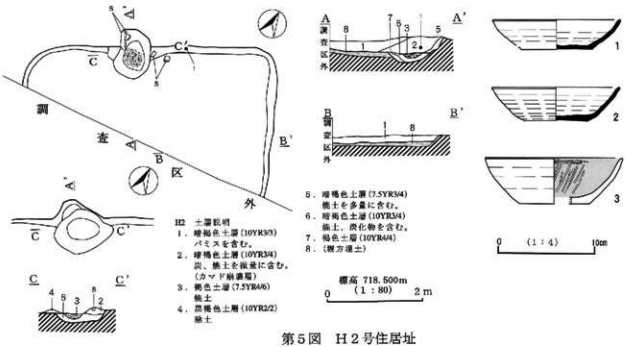
これらより９世紀後半が比定される住居である。

２）Ｈ２号住居址

Ａトレンチにあり、住居の北側を調査している。南北〈1.08〉m、東西5.0m、壁高９～19cmを測る。カマドは北壁中央にあり、カマドの軸の方位はＮ－28°－Ｗを指している。カマドの西側壁には板状に礫が貼り付けられ、焼け込んでいる。カマドは粘土を貼って構築している。ピットは検出されていない。

出土遺物には須恵器、土師器がある。須恵器は実測はしていないが厚さ1.3cmで、外面に叩き目のある大型の壺か甕の破片がカマドから出土する。須恵器長頸壺の口縁部片がある。須恵器高台付杯は丸底気味の底部に高台が貼付され、高台の畳付に凹線が入る。実測資料の須恵器杯は、底部回転糸切りで、１の口縁は直線的、２の口縁は内湾し１より底径が７cmと0.5mm小さく、ロクロ痕が顕著である。土師器は武蔵甕片があるが実測はできない。土師器杯は厚手で、内面ミガキ黒色処理、底部は平底で、ヘラ削り調整がなされている。

これらより８世紀第４四半期ころから９世紀初頃が想定される住居である。



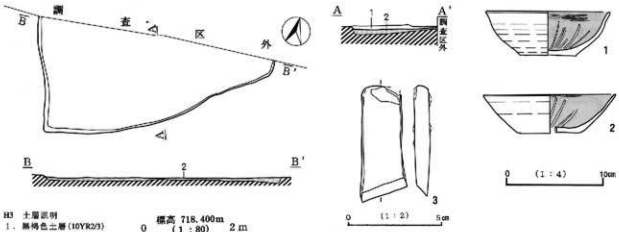
第５図　Ｈ２号住居址

3）Ｈ３号住居址

Ａトレンチにあり、住居の南側を調査している。南北〈2.24〉m、東西4.76m、壁高０～11cmを測る。覆土は黒褐色土である。ピットは検出されていない。

出土遺物には灰釉陶器、須恵器、土師器がある。灰釉陶器は椀の口縁で、内外施釉される。やや軟質なものである。須恵器は甕片と底部回転糸切りの杯、天井部がヘラ削りされる蓋があるが、破片のため実測はしていない。土師器のロクロ甕、武蔵甕片もある。実測資料では土師器杯・甕と鉄製の鑿がある。土師器杯は平底で、１は底部回転糸切り、２は底部回転糸切り後ヘラ削りされる。いずれも内面は放射状の雑なミガキ後黒色処理がなされる。鑿は片刃で、長さ6.3cmを測る。

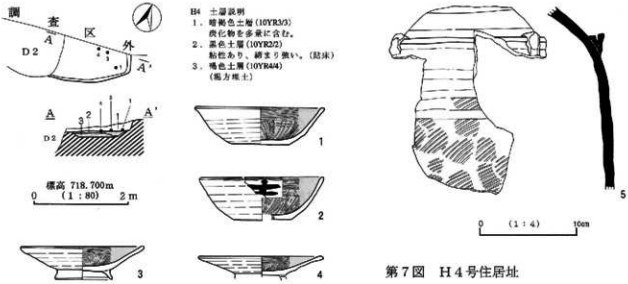
これらより、10世紀後半の住居址であろうか。



第６図　Ｈ３号住居址

4）Ｈ４号住居址

Ａトレンチにあり、Ｄ２号土坑に切られている。南北〈80〉cm、東西〈148〉cmで、住居の南東部を調査している。Ｄ２の西にプランがないことから東西の規模は３ｍ未満であろう。壁高は最大で20cmを測る。ピットは検出されていない。



第７図　Ｈ４号住居址

出土遺物には須恵器四耳壺、土師器武蔵甕片・杯・皿がある。四耳壺は肩に耳が貼付される。外面はナデ調整されるが、中位から下部は叩き目を残している。土師器杯は、底部回転糸切りで、内面は丁寧にミガキ調整後黒色処理される。２の杯外面には墨書があり、下部欠損ではあるが「土」までが判読できる。土師器皿は回転糸切り後高台を貼付している。内面はミガキ黒色処理されるが色変化して褐色を呈している。３の高台は外にいくらか反っている。

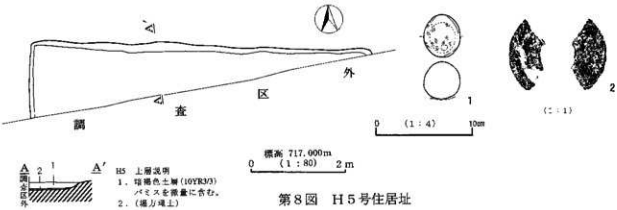
これらより９世紀前半の住居であろうか。

5）Ｈ５号住居址

Ｂトレンチにあり、南北（1.4）ｍ、東西7.04m、壁高８～17cmを測る。住居の北壁を調査している。覆土は暗褐色土である。ピットは検出されていない。

出土遺物は磨石と古銭である。土器片は出土していない。古銭は1/4残存し、判読不明である。

堀方が浅く、渡来銭とみられる破片があることから、中世の竪穴状遺構であろうか。



第８図　Ｈ５号住居址

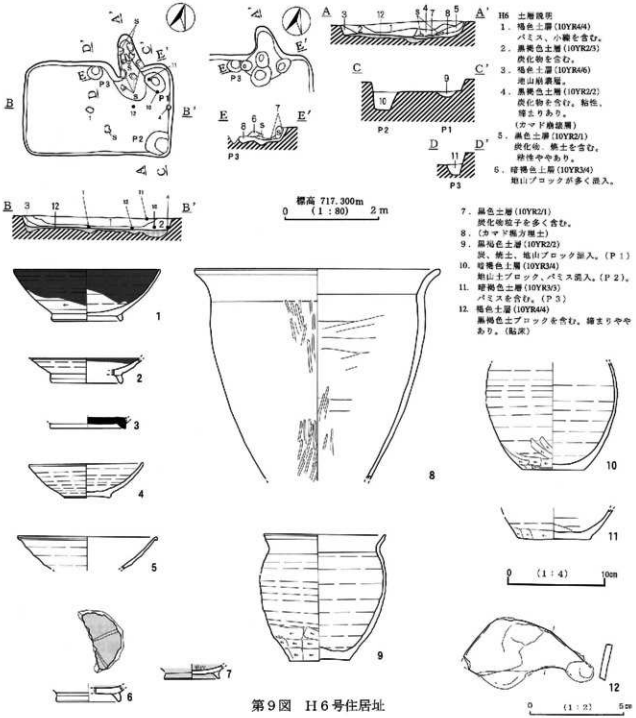
6）Ｈ６号住居址

Ｂ地点にあり、南北1.82m、東西2.98m、壁高は最大で27cm、5.4㎡を測る長方形の住居である。カマドは北壁中央より東に寄ってあり、礫を芯材に粘土を貼って構築している。主柱穴は検出されていない。カマドの両脇にはピットがあり、東は浅いＰ１、西にあるやや深いＰ２（深さ２０cm）がある。南東隅には円形の径50cm、深さ38cmの貯蔵穴がある。

出土遺物には灰釉陶器、須恵器、土師器がある。灰釉陶器は椀で、１は漬け掛けされ、高台は貼付される。高台の形態はいくらか内湾するものの断面形は四角に近いものである。２の灰釉陶器椀はハケ塗りで、貼付される高台は三日月形態を少し残している。２の須恵器高台付杯は杯部がそろって欠け落とされ、再加工され円板になっている。４の土師器杯は底部回転糸切り、内面がナデ調整である。底部径は５cmと小さく内面の黒色処理はなされていない。５の杯の口縁内面もナデ調整のみである。６の椀は口縁がきれいに欠け落ちており、円板として二次利用されたもののようである。７は黒色土器の皿とみられるが、内面は丁寧なミガキ、外面と高台内面はナデ調整である。８は内面にミガキ調整があることから甑としたが、底部がないので甕であるかもしれない。９はロクロ調整の小型甕である。底部は回転糸切り、胴下部はヘラ削り、口縁は横ナデ、胴中位にロクロ痕が残っている。内面はナデ調整され、ロクロ痕は顕著ではない。やや厚みのある甕である。10のロクロ小甕は、薄手で、胴

下部・底部はヘラナデに近いヘラ削りがなされ、胴部のロクロ痕もナデられる。内面はヘラ状具でナデられ、平行に横線が残る「カキ目」になっている。11の甕の底部は回転糸切り後、弱くヘラナデがなされている。内面はナデ調整である。

これらより、本址は10世紀後半～11世紀前葉が想定される。



第9図 H6号住居址

7）H７号住居址

E地点にあり、西壁が区域外である。南北3.02m、東西〈2.62〉m、最大壁高41cmを測る方形に近い住居とみられる。カマドは北壁の東寄りにあり、カマドの崩壊層上面より、多量の土器を出土している。Ⅰ区より出土した土師器皿からは逆位に「刑部仁丸」が２カ所、正位に「仁丸　十」が１カ所の墨書が合計３カ所にかかれた土師器椀の墨書土器が出土している。カマドは煙道上面に石を組んでおり、支脚石が直立していた。床面はしまっており、南の床下は東西に掘り込みがみられた。

主柱は住居址の中央東西にあったとみられ、東側のＰ１を調査した。円形で径34cm、深さ73cmを測る。東壁南寄りにあるＰ２はやや楕円形で長径43cm、深さ36cmを測る。

出土遺物には須恵器、土師器、鉄製品の断面長方形の角軸がある。灰釉陶器はない。須恵器はわずかで、実測個体の他に糸切り底の杯と小壺の破片ある。１の須恵器杯は底部回転糸切り後、ヘラでなでられたのか底部と口縁部が判然とせず、丸底状である。下部は張り、口縁上部は外反する。土師器は多量の杯と椀・皿・甕がある。土師器杯類は、19を除いて底部回転糸切り、いずれもミガキ黒色処理されている。６～９・11・13・18は口径に対し底径が５～６cmと小さいもので、７・13・18はやや大振りで重い。10・12・19は底径８cmと底径の割合が大きいものである。19は底部手持ちヘラ削りされる。２～５・14・15・17の底径は6.5cm前後の近い値である。ミガキの上に暗文を十字に施しているものは２・３・19がある。16の杯は鉢とするべきなのか大振りである。内面ミガキ黒色処理、底部糸切り後口縁下部、底部周辺が回転ヘラ削りされる。

土師器甕は武蔵甕とロクロ甕がある。武蔵甕は口縁部形態「コ」字形態である。28の外面胴部は斜め削りに縦方向の削りの重りがみられる。ロクロ甕は胴下部に削り調整をしている。

これらより９世紀後半の住居址と想定される。

8）H８号住居址

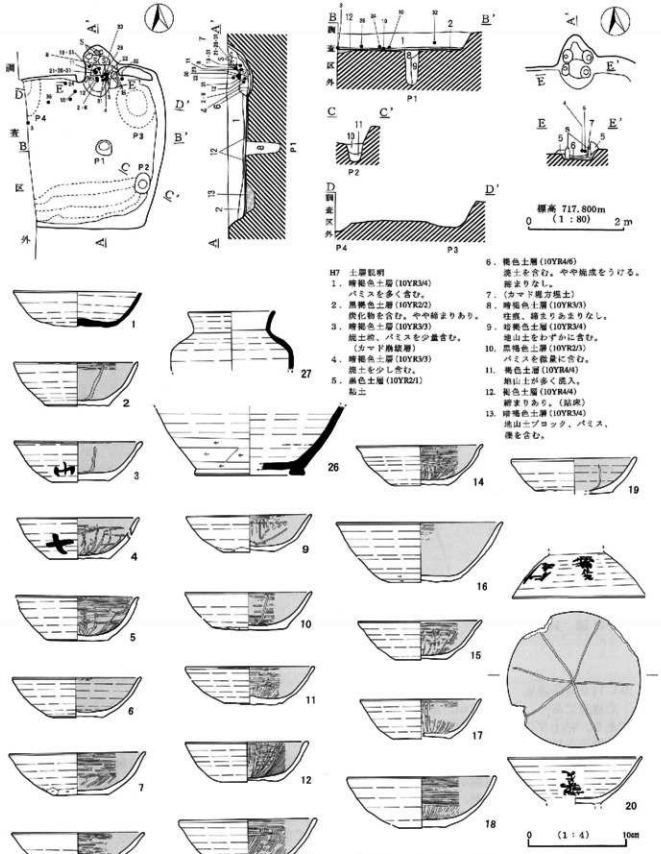
C地点にあり、南東隅がわずかに調査できていない。南北2.97m、東西2.96mの方形の住居で、最大壁高54cmを測る。カマドは北壁中央にあり、火床は住居址の内側に設けられる。カマドの軸方位はN－6°－Wを指す。カマドは袖先端に石を立てて粘土で袖をつくり、焚き口に長さ40cmの石を乗せて焚き口としていたようである。支脚石は直立した状態で検出された。

主柱穴はＰ１～Ｐ４の４本で南側はピットが重複していることから立て替えがなされたようである。径40cm、深さ40cm規模のものである。Ｐ６とＰ７は西壁によって南北にあるピットで径は60cmと大きいが深さは20cm前後である。Ｐ５は南の壁下にあり、径58cm、深さ17cmを測る。出入り口にあるピットであろう。

出土遺物には須恵器、土師器、石製品、鉄製品、羽口がある。須恵器は、蓋、杯、高台付杯、広口壺、長頸壺がある。１の蓋は小型の宝珠形のつまみが付き、外面天井部のヘラ削りは手持ちで不規則になされ、口縁端部の折返しはわずかである。２の須恵器杯はロクロ痕が顕著で、底部は手持ちヘラ削りされる。３の杯はナデ調整がなされ、ロクロ痕は消されている。底部は回転ヘラ切り後、回転ヘラナデされている。４の高台付杯は幅広の畳付である。内外面ナデ調整される。６は長頸壺、７・８は広口壺であろうか、８の器肉は薄い。須恵器の器種が豊富である。土師器杯は破片で少数はあるが、実測資料はない。内面ミガキ黒色処理され、底部にヘラ削りがされている。土師器甕は武蔵甕、ロクロ甕、羽釜がある。13の武蔵甕は口縁の外反強く、肩が張り肩に最大径をもつ。14の甕は口縁部が長く「く」字形を呈し、口径が大きい。15はその下部であろう。10・11は小型のロクロ甕で、胴下部・底部はヘラ削りがなされている。外面のロクロ痕はナデ調整されロクロ痕は顕著ではない。12の羽釜はロクロ調整後鍔が付けられ、口縁横ナデ、胴部ヘラ削りされている。内面は口縁にロクロ痕が顕著であるが、胴部はナデ調整される。

16・17は敲石、磨石、19は青銅製、20は鉄製鎌、21は鉄で断面円形の棒状であるが不明品である。

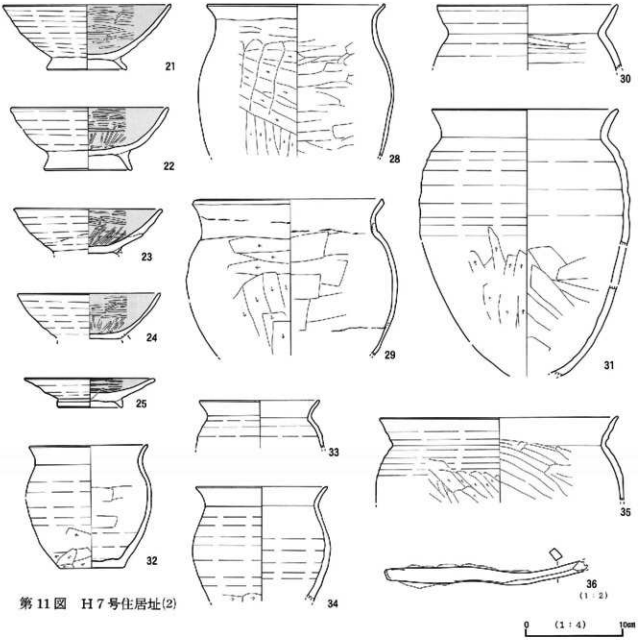
これらより、本住居は８世紀第３四半期頃が当てられよう。



H7 土層説明

1. 暗褐色土層(10YR3/4)
   パミスを多く含む。
2. 黒褐色土層(10YR2/2)
   炭化物を含む。やや締まりあり。
3. 暗褐色土層(10YR3/3)
   粘土粒、パミスを少量含む。
   (カマド崩壊層)
4. 暗褐色土層(10YR3/3)
   炭土を少し含む。
5. 黒色土層(10YR2/1)
   粘土
6. 褐色土層(10YR4/6)
   炭土を含む。やや粘成をうける。
   締まりなし。
7. (カマド粗写粘土)
8. 暗褐色土層(10YR3/3)
   住痕、締まりあまりなし。
9. 暗褐色土層(10YR3/4)
   地山土をわずかに含む。
10. 黒褐色土層(10YR2/3)
    パミスを微量に含む。
11. 褐色土層(10YR4/4)
    地山土が多く混入。
12. 黒色土層(10YR2/1)
    締まりあり。(結束)
13. 暗褐色土層(10YR3/4)
    地山土ブロック、パミス、炭を含む。

第10図　H7号住居址(1)



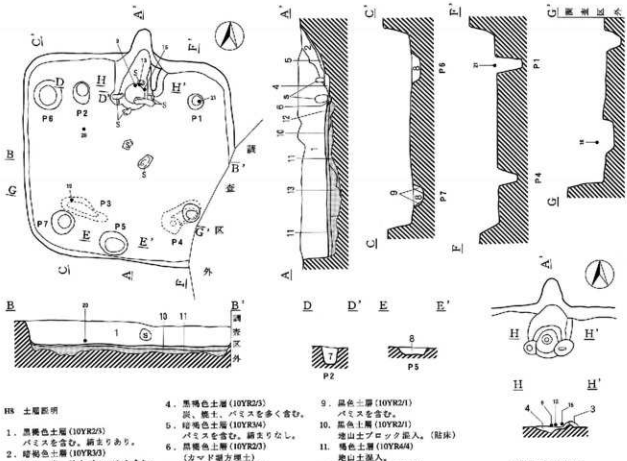
第11図　H７号住居址(2)

9）Ｈ９号住居址

Ｃ地点にあり、南北3.38m、東西（1.92）ｍをはかり、住居の東半域を調査した。最大壁高は36cmである。粘土ブロックが北壁にみられ、カマドとみられるが、撹乱により壊されたようである。ピットは検出されていない。

出土遺物には須恵器、土師器、鉄製品がある。須恵器は大型品の破片がある。口縁は外反し、内外横ナデ、外面肩部には横線がのこり、内面には当て具痕残る。須恵器杯の口縁部破片も出土している。土師器は武蔵甕胴部片と杯、椀、皿がある。土師器杯類の内面はいずれもミガキ黒色処理される。９の皿は外面底部ともにミガキ黒色処理される黒色土器である。４の土師器杯は底が厚く、底部手持ちヘラ削りしている。５の椀の外面は墨書があるが判読できない。

これらより本住居址は９世紀前半とされよう。



第12図　H8号住居址(1)

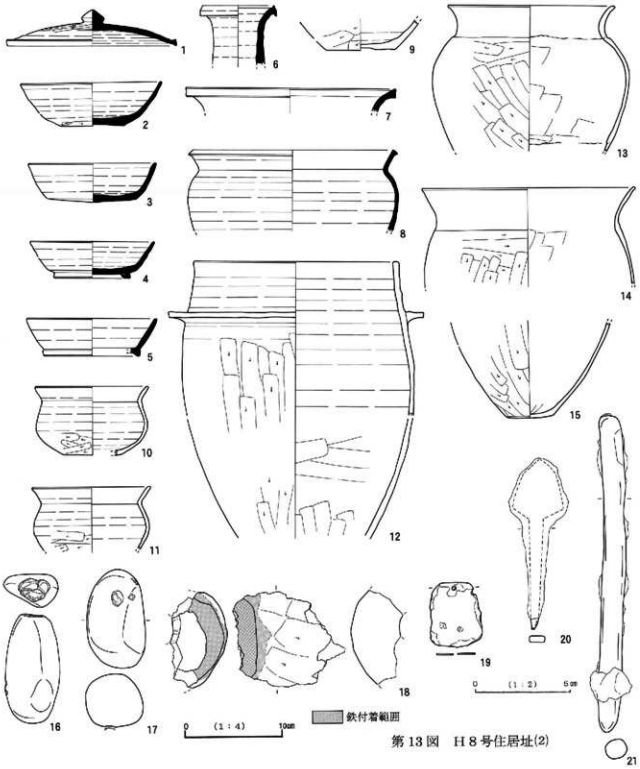
10）H10号住居址

D地点にあり、南が調査区域外である。南北〈3．34〉m、東西4.82m、最大壁高38cmを測る。カマドを北壁中央に持ち、カマドの方位はN－19°－Wを指す。カマドは礫を芯にして、粘土で構築しており、袖と火床が残っていた。床面はしまっており、粘土ブロックを含んでいる。

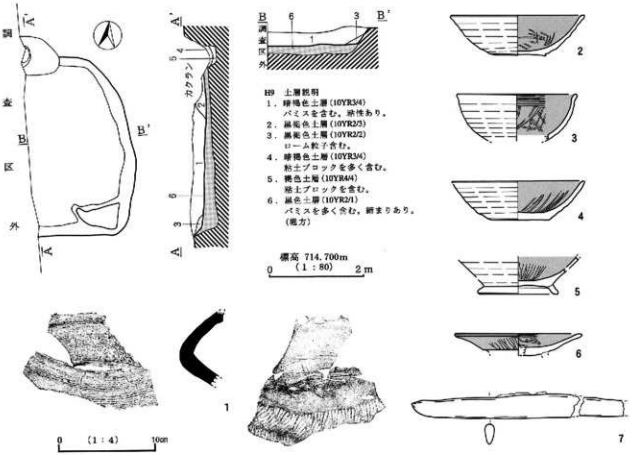
主柱穴はP１～P３の３本が方形に検出され、径46～62cm、深さ37～52cmを測る。

出土遺物には須恵器、土師器、鉄製の刀子がある。須恵器は蓋、杯、高台付杯がある。蓋は口径21cm前後と大振りで厚手である。カマドの構築材として使用されたのか粘土が付いており、３の高台付杯とともに火床上面から出土する。須恵器杯は４・５が底部回転糸切りのままで、６はヘラ削りされる。５の底径は小さく3.7cm、４は4.6cm、６は（9.0）cmと差がある。土師器は甕形土器があり、薄手の武蔵甕である。７は口縁部形態が「く」字形である。８はやや厚みのある武蔵甕の小型甕で、胴部が扁平である。９の胴下部はヘラ削りされるが、内面にロクロナデが残っていることからロクロ甕の小甕であろう。

これより、５の須恵器杯などから８世紀第３四半期の住居であろう。１～３の土器は前代のものであろう。



第13図　H8号住居址(2)



第14図　H9号住居址

11）H11号住居址

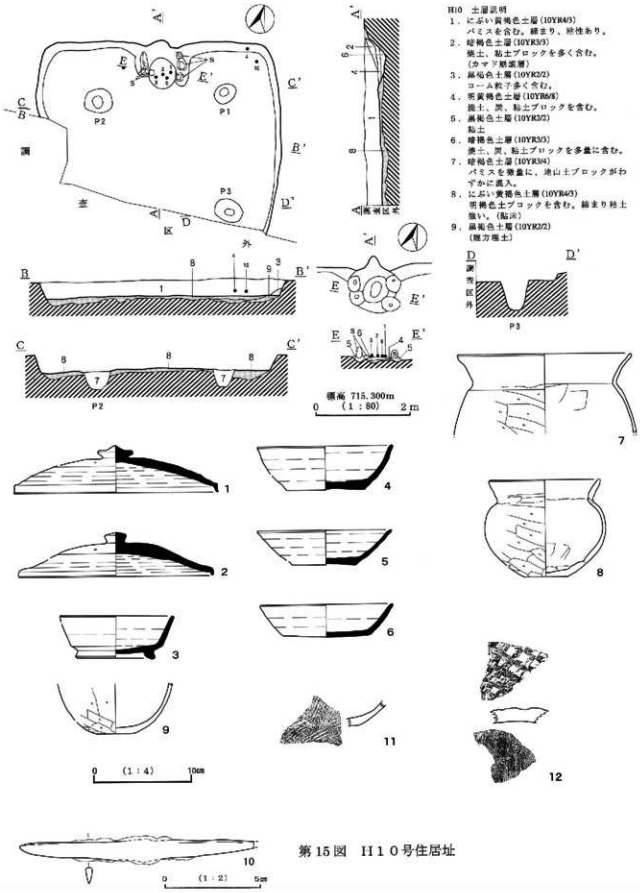
C地点にあり、住居の南半域を調査している。南北（1.64）m、東西3.08cm、最大壁高17cmを測る。カマドは東壁の南東隅に近くにあり、焼土がみられた。柱穴は南にP1があり、径33cm、深さ19cmを測る。

出土遺物には須恵器、土師器、凝灰岩製砥石がある。須恵器杯は1・2とも底部は手持ちヘラ削りされている。土師器は甕があり、武蔵甕である。口縁部形態「く」字形である。

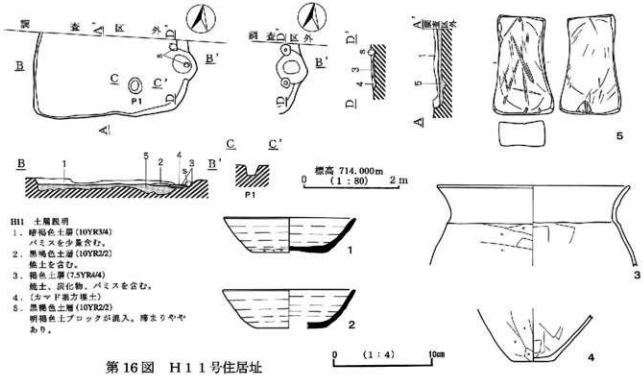
これらより本址は8世紀第3四半期があてられようか。

11は外面にハケ目のある土師器甕のおそらく小型甕の底部片で、胎土にウンモ粒・石英粒が含まれる。12は布目の平瓦で、表面はタタキ目、内面は布圧痕を消してヘラナデがなされている。厚さ1.4cmを測る。

また、巻頭二に示したが長さ4cm・厚さ1cmほどの漆喰片が検出面から出土している。片面は滑らかである。壁の一部と推測されるが、瓦片と関連する意味深いものか、検出であるため混入も考えられ明言はさけたい。



第15図 H10号住居址



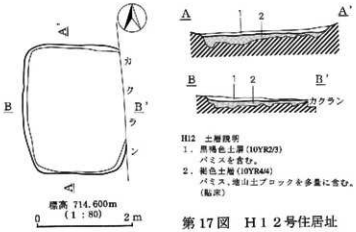
第16図　H１１号住居址

12）H12号住居址

C地点にあり、東に攪乱が南北に入る。南北2.62m、東西（2.04）mの長方形を呈す。壁高は0～12cmである。覆土は黒褐色土層である。カマド、柱穴は検出されていない。

実測できる遺物はないが底部回転糸切りの須恵器杯、灰釉陶器は盌、段皿、皿がある。土師器は内面ミガキ、黒色処理の杯、土師器甕は武蔵甕片がある。

これらより、平安時代の住居址であろう。



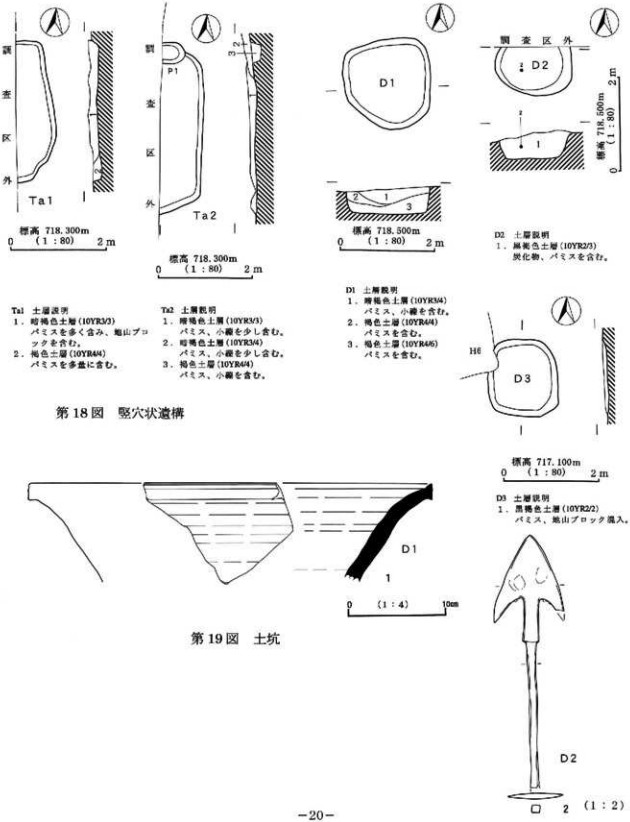
第17図　H１２号住居址

第２節　竪穴状遺構

Ｔａ１・Ｔａ２ともにＥトレンチにあり、東側を調査している。形態も明確ではなく、出土遺物がないので時期はわからない。性格も不明である。

第３節　土坑

本調査では３基の土坑が検出された。Ｄ１からは須恵器大型品の甕口縁、土師器は内面ミガキ黒色処理の椀があり、Ｄ２からは鉄鏃が出土している。

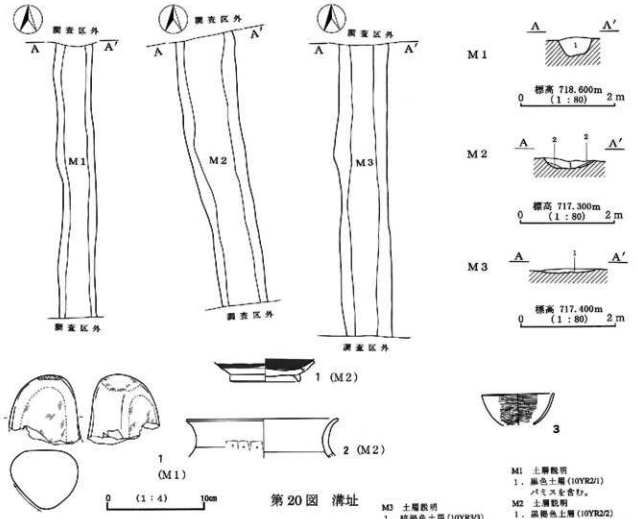


第 18 図　竪穴状遺構

第 19 図　土坑

第４節　溝址

Ｍ１とＭ２は南北方向に連続するようである。Ｍ２から灰釉陶器椀が出土する事から平安時代の溝である。Ｍ２－２の土師器甕は丸胴甕で、古墳時代後期から奈良のもであろう。Ｍ３は遺物がないので時期は不明である。



第20図　溝址

第５節　単独ピット

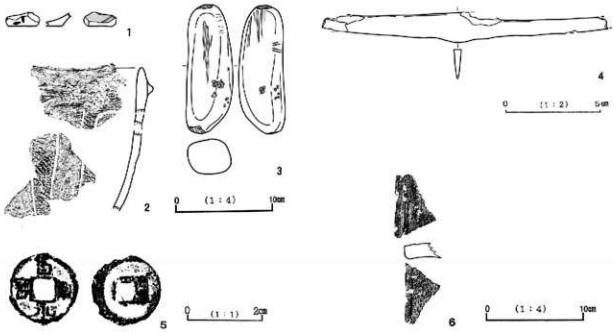
検出したのはＣ・Ｅ地点から３個である。径・深さともにあり、規模が大きいことから、掘立柱建物址の一部とみられる。

第６節　検出遺物

５の「貞観永寶」は皇朝十二銭の一つで、870年から20年間鋳造されている。皇朝十二銭のなかでは鋳銭が粗雑になり、小さくなっている。

６は丸瓦であろうか、厚さ1.3cm、内面に布目を残し、外面はヘラナデされている。

縄文土器が３点ある。縄文後期称名寺で、地紋に無節の縄文、沈線区画し磨消縄文がなされる。図示していないが、H10からは縄文後期の粗製の深鉢口縁片、Ａ地点流路からは加曽利Ｂ深鉢口縁片がある。



第21図　検出遺物

第Ⅳ章　まとめ

南下北原遺跡の今回の調査では奈良から平安時代の集落が確認された。奈良時代中頃に集落が開け、平安時代の10世紀頃まで継続するようである。

本調査は部分的な調査ではあったが、大きな成果を得た。H７号住居址から出土した「刑部仁丸」の墨書土器である。平安時代の百科事典『和名抄』には、佐久八郷の中に「刑部」が記されている。佐久八郷は奈良時代後半には成立していたとみられており、「刑部郷は、千曲川左岸の平坦部、岸野・野沢地区から臼田あたりの伴野庄あたりで、佐久でもっとも早く稲作の開けた地帯としている。」（『佐久市志』P479）ちなみに本調査地点は、大井郷にあたり、岩村田を中心とした地域であり、大井発祥の地は長土呂と言う説もあり、長土呂地点からは平安時代の「大井」の刻書・墨書土器が多く出土している。既出資料「刑部」の墨書は、岩村田市街の北、高速インター付近の上久保田向遺跡ⅠのH６（９世紀）の椀にみられた。南下北原遺跡H７号住居址が刑部郷の刑部を名乗る「刑部仁丸」という人と関係していたことは明らかである。人名を記した墨書は群衙・官寺などから出土するといわれている。（2000、高島英之『古代出土文字資料の研究』）多量に出土した杯類も関連するのであろう。また刑部郷ではないところから出土することで、ここ長土呂地点に物や人が集まる要因があるとすれば、群衙や定額寺との関連について考慮される。

第1表　南下北原遺跡　遺構一覧表

竪穴住居址・竪穴状遺構　　（残）（推定）

遺構名	検出位置	時代	形態	規模（cm・m²） 南北長	東西長	壁高	面積	主軸方位	カマド炉	柱穴	備考
H1	A	平安	－	(256)	352	6～23		N-3°-W	北	他1	南側調査区外。
H2	A	平安		(180)	500	9～19	－	N-28°-W	北	－	南側調査区外。
H3	A	平安	－	(224)	476	0～11	－	N-16°-W	－	－	北側調査区外。
H4	A	平安	－	(80)	(148)	0～20	－	N-20°-W	－	－	北側調査区外。D2に切られる。
H5	B	不明	－	(140)	704	8～17	－	N 2° E	－	－	南側調査区外。
H6	B	平安	長方形	182	298	17～27	5.42	N-18°-W	北東	貯穴1　他2	D3を切る。
H7	E	平安	－	302	(262)	25～41	－	N-4°-E	北東	主柱1　他1　床ド2	西側調査区外。
H8	C	奈良	方形	297	296	42～54	－	N-6°-W	北	主柱4　他3	南東調査区外。
H9	C	平安	－	338	(192)	11～36	－	N-7°-W	北	－	南側調査区外。カクランに切られる。
H10	D	奈良	－	(334)	482	14～38	－	N-19° W	北	主柱3	南側調査区外。
H11	C	奈良	－	(164)	308	2～17	－	N-82°-E	東	主柱1	北側調査区外。
H12	C	平安	長方形	262	204	0～12	5.34	N-2°-W	－	－	カクランに切られる。
Ta1	E	不明	－	284	(72)	11～18	－	N-4°-W	－	－	西側調査区外。
Ta2	E	不明	－	300	(80)	0～6		N 6°-W	－	他1	西側調査区外。

土坑　　（残）（推定）

遺構名	検出位置	平面形	長軸長（cm）	短軸長（cm）	深さ（cm）	長軸方位	備考
D1	A	不整形	192	180	60	N-7°-W	
D2	A	－	160	(104)	42	N 86° E	北側調査区外。H4を切る。
D3	B	長方形	162	144	13	N-3°-W	H6に切られる。

溝址　　（残）（推定）

遺構名	検出位置	全長（m）	幅（cm）	深さ（cm）	備考
M1	A	(5.78)	72～80	22	南北調査区外。
M2	B	(6.16)	96～110	14～38	南北調査区外。
M3	B	(5.76)	92～122	5～23	南北調査区外。

単独ピット　　（残）（推定）

遺構名	検出位置	規模（cm・m²） 長径	短径	深さ	平面形	覆土	備考
P1	C	46	45	34	円形	－	
P2	C	54	44	18	楕円形	－	
P3	E	88	58	61	楕円形	－	

第2表　H1号住居址出土遺物一覧表　　（ ）残（ ）推定

番号	種類	器種	法量(cm) 口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	(g)	調整・文様 内面	外面	備考	出土位置
1	灰釉陶器	皿	(12.4)	(6.2)	(3.1)		施釉	施釉　糸切り後高台貼付	回転実測	Ⅲ区
2	須恵器	－	－	(14.0)	(7.7)		ロクロナデ→ナデ	タタキ→横ナデ	回転実測	Ⅱ区
3	土師器	坏	(13.2)	6.0	4.2		ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り	回転実測	Ⅰ区
4	十師器	坏	12.2	6.8	4.2		ミガキ→暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り	完全実測	No.2
5	十師器	坏	(14.1)	(5.0)	5.0		ナデ（一部ミガキ）→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り	回転実測	堀方
6	土師器	坏	13.7	6.5	4.2		ミガキ→暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り	完全実測	No.1
7	土師器	坏	(13.6)	5.3	4.6		ミガキ→黒色処理	ロクロナデ・下部・底部ヘラケズリ	回転実測	Ⅰ区

番号	種類	器種	法量(cm) 最大径	最大幅	最大厚	(g)	備考	出土位置
8	骨		(3.6)	(1.2)	(0.5)	(1.54)		Ⅲ区
9	骨		(6.8)	(2.2)	(1.1)	(7.02)		P 1
10	骨		(8.5)	(2.4)	(0.7)	(5.91)		Ⅰ区

第3表　H2号住居址出土遺物一覧表　　（ ）残（ ）推定

番号	種類	器種	法量(cm) 口径（長）底径（幅）	器高（厚）	(g)	調整・文様 内面	外面	備考	出土位置
1	須恵器	坏	(13.6)	7.5	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り	完全実測	No.1
2	須恵器	坏	(13.8)	(6.8)	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り	回転実測	Ⅱ区
3	土師器	坏	(14.6)	(7.4)	(4.9)	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→ケズリ　磨耗	回転実測	カマド

第4表　H3号住居址出土遺物一覧表　　（ ）残（ ）推定

番号	種類	器種	法量(cm) 口径（長）底径（幅）	器高（厚）	(g)	調整・文様 内面	外面	備考	出土位置
1	土師器	坏	(13.2)	(6.0)	4.7	暗文風ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り	回転実測	Ⅰ区
2	土師器	坏	(14.0)	(6.8)	(4.2)	暗文風ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部切り離し後ヘラケズリ	回転実測	Ⅰ区堀方

番号	種類	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	(g)	備考	出土位置
3	鉄製品	鎌	(6.2)	2.5	0.8	(57.65)		内側

第5表　H4号住居址出土遺物一覧表　　（ ）残（ ）推定

番号	種類	器種	法量(cm) 口径（長）底径（幅）	器高（厚）	(g)	調整・文様 内面	外面	備考	出土位置
1	土師器	坏	13.8	6.1	4.1	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→回転糸切り	完全実測	No.1
2	土師器	坏	(13.2)	(6.2)	4.6	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→回転糸切り　墨書「上？」	回転実測	
3	土師器	皿	13.1	6.0	4.6	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→回転糸切り→高台貼付	完全実測	No.2
4	土師器	皿	13.3	－	2.2	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→回転糸切り→高台貼付	完全実測	No.3
5	須恵器	四耳壺	－	－	－	ロクロナデ	タタキ→ナデ→耳貼付→胴部細貼付	破片実測	Ⅰ区トレンチ

第6表　H5号住居址出土遺物一覧表　　（ ）残（ ）推定

番号	種類	器種	法量(cm) 口径（長）	底径（幅）	器高（厚）	(g)	備考	出土位置
1	石製品	磨石	4.6	3.8	3.9	97.94	全体になめらか　正裏と左側にすり面	
2	青銅	古銭	(1.9)	(0.8)	0.1	(0.88)	「○○○宋？」	

第7表　II 6 号住居址出土遺物一覧表

（ ）残（ ）推定

番号	種類	器種	法量(cm) 口径(径)	底径(幅)	器高(厚)	(g)	調整・文様 内面	外面	備考	出土位置
1	灰釉陶器	椀	(15.6)	7.0	5.5		ロクロナデ→施釉	ロクロナデ→坏下部回転ヘラケズリ →高台貼付 →施釉	回転実測	II 区 No.5
2	灰釉陶器	椀	－	(7.4)	(2.6)		ロクロナデ→施釉	ロクロナデ→高台貼付→施釉	回転実測	I 区
3	須恵器	高台坏	－	8.0	(1.2)		ロクロナデ →磨耗	高台貼付	完全実測　上板転用か	I 区
4	土師器	坏	12.0	4.8	3.6		ロクロナデ	ロクロナデ→回転糸切り	完全実測	No.1
5	土師器	椀	(14.6)	－	(3.5)		ナデ	ロクロナデ	回転実測	II・III 区
6	土師器	椀	－	(6.6)	(1.7)		暗文→黒色処理	底部切り離し後高台貼付	回転実測	I 区
7	土師器	黒色坏		5.8	(1.5)		ミガキ→黒色処理	底部切り離し→高台貼付→黒色処理	完全実測	カマド
8	土師器	甕	(25.8)	－	(22.4)		ナデ→口縁横ナデ→下部ミガキ	口縁横ナデ→ミガキ	回転実測	I 区
9	土師器	小甕	(12.8)	6.4	13.4		ロクロナデ→口縁横ナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り→胴下部・下部ヘラケズリ	回転実測	I 区　P 1
10	土師器	小甕	－	6.6	(11.3)		ロクロナデ	ロクロナデ→底部ヘラナデ→胴部ヘラケズリ	完全実測	No.2
11	土師器	坏	－	7.6	(3.2)		ナデ	ロクロナデ→胴下部・底部ヘラケズリ	完全実測	No.3

番号	種類	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	(g)	備考	出土位置
12	鉄製品	?	(5.8)	(3.8)	(0.7)	(37.38)		No.4

第8表　II 7 号住居址出土遺物一覧表

（ ）残（ ）推定

番号	種類	器種	法量(cm) 口径(径)	底径(幅)	器高(厚)	(g)	調整・文様 内面	外面	備考	出土位置
1	須恵器	坏	13.4	5.6	4.0		ロクロナデ →磨耗	ロクロナデ→底部回転糸切り	完全実測	カマド
2	土師器	坏	13.0	6.7	4.7		ロクロナデ・ミガキ →十字暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り	完全実測	No.14
3	土師器	坏	13.4	5.9	4.3		ロクロナデ→器ミガキ→十字暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り　墨書「寸」	完全実測	No.6
4	土師器	坏	(12.7)	6.3	4.6		ロクロナデ→暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り　墨書「十」	完全実測	No.19
5	土師器	坏	(12.8)	6.5	4.7		ロクロナデ→暗文 →黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り	完全実測	No.17
6	土師器	坏	13.6	5.7	4.3		ロクロナデ→わずかにミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り	完全実測	No.11
7	土師器	坏	14.3	5.7	4.6		ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→坏下部・底部ヘラケズリ	完全実測	カマド II区
8	土師器	坏	14.0	4.8	3.8		ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り→坏下部ヘラケズリ	完全実測	No.8
9	土師器	坏	13.4	5.5	4.0		ロクロナデ→ミガキ →黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り→坏下部ヘラケズリ	完全実測	カマド
10	土師器	坏	13.5	7.9	4.1		ロクロナデ→暗文(十字文) →黒色処理(色変)	ロクロナデ→底部回転糸切り→底部ヘラケズリ	完全実測	No.2　No.3
11	土師器	坏	13.7	6.1	4.1		ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	完全実測	No.13
12	土師器	坏	(13.2)	(6.2)	4.3		ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り	回転実測	No.12
13	土師器	坏	14.8	5.6	5.2		ミガキ→黒色処理	ロクロナデ →底部回転糸切り	完全実測	No.20 カマド
14	土師器	坏	(13.5)	(5.8)	4.2		ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り	回転実測	カマド
15	土師器	坏	(13.2)	(5.4)	4.1		ミガキ→黒色処理（色変）	ロクロナデ→底部回転糸切り	回転実測	IV区
16	土師器	大坏	(17.6)		(6.3)		ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り→坏下部ヘラケズリ	回転実測	I 区
17	土師器	坏	(12.8)	(6.4)	4.2		ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り	回転実測	II 区
18	土師器	坏	(15.8)	5.0	5.4		ミガキ →黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り	完全実測	カマド

番号	種類	器種	法量(cm) 口径(高)	底径(幅)	器高(厚)	(g)	調整・文様 内面	外面	備考	出土位置
19	土師器	坏	13.1	8.1	3.8		ロクロナデ →十字暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部ヘラケズリ	完全実測	カマド
20	土師器	椀	14.0	–	(5.6)		ロクロナデ →ナデ→暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り →高台貼付 墨書3ヶ所	完全実測	I区
21	土師器	椀	17.8	8.5	6.9		ミガキ →黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り →高台貼付	完全実測	No.18
22	土師器	椀	16.7	9.4	6.7		ミガキ→黒色処理	ロクロナデ →底部回転糸切り→高台貼付	完全実測	No.7
23	土師器	椀	15.6	–	(4.8)		ミガキ→黒色処理	ロクロナデ →底部回転糸切り→高台貼付	完全実測	No.15
24	土師器	椀	15.0	–	4.9		ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り→高台貼付	完全実測	No.4 カマドⅢ・Ⅳ区
25	土師器	皿	13.8	(7.0)	3.1		ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→高台貼付	完全実測	カマド
26	須恵器	壺		(11.6)	(7.3)		ロクロナデ→ナデ	ロクロナデ →ド部回転ヘラケズリ→高台貼付	回転実測	I区
27	須恵器	如意形	(9.2)	–	(6.2)		ロクロナデ→口縁横ナデ	ロクロナデ	回転実測	Ⅲ・Ⅳ区
28	土師器	武蔵甕	(18.8)	–	(16.0)		ヘラナデ→口縁横ナデ	胴部ヘラケズリ →口縁横ナデ	回転実測	No.18 カマド
29	土師器	武蔵甕	20.1	–	(16.6)		ヘラナデ→口縁横ナデ	ヘラケズリ→口縁横ナデ	完全実測	I～Ⅳ区 P1
30	土師器	ロクロ甕	(19.0)	–	(6.5)		胴部横ナデ→口縁ナデ	ロクロナデ	回転実測	No.16
31	土師器	ロクロ甕	(19.5)	–	(28.3)		ロクロナデ→ヘラナデ→口縁ヨコナデ	ロクロナデ→胴部ヘラケズリ→口縁横ナデ	完全実測	No.10 No.18 No.20 カマドI区
32	土師器	小型甕	(12.6)	7.0	13.0		ロクロナデ→口縁ヨコナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り→胴部ヘラケズリ	完全実測	No.1
33	土師器	小型甕	(12.6)	–	(5.2)		ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	カマド
34	土師器	小型甕	(13.8)	–	(12.7)		ロクロナデ→口縁横ナデ	ロクロナデ →胴ド部ヘラケズリ	完全実測	No.18 カマド
35	土師器	ロクロ甕	(25.6)		(8.8)		口縁横ナデ→胴部ヘラナデ	口縁～胴部ロクロナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	カマド

番号	種類	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	(g)	備考	出土位置
36	鉄製品	刀子	(10.6)	(1.2)	(0.7)	(14.00)		No.5

第9表　H8号住居址出土遺物一覧表

（ ）残　（ ）推定

番号	種類	器種	法量(cm) 口径(高)	底径(幅)	器高(厚)	(g)	調整・文様 内面	外面	備考	出土位置
1	須恵器	蓋	(17.9)	–	3.8		ロクロナデ →ナデ	ロクロナデ →天井部手持ちヘラケズリ、宝珠つまみ貼付	回転実測	Ⅲ区
2	須恵器	坏	(14.8)	6.5	4.6		ロクロナデ 糸痕	ロクロナデ→底部ヘラナデ	完全実測	I・Ⅱ区
3	須恵器	坏	13.4	9.2	4.2		ロクロナデ 糸痕	ロクロナデ →ヘラ切り→ヘラケズリ	完全実測	Ⅳ区
4	須恵器	坏	(12.0)	7.9	3.9		ロクロナデ	ロクロナデ→ヘラ切り→高台貼付	完全実測	カマド Ⅲ区
5	須恵器	有台坏	(13.6)	(10.0)	4.0		ロクロナデ	ロクロナデ 高台貼付	回転実測	Ⅲ区
6	須恵器	蓋	(7.6)		(6.3)		ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	Ⅲ・Ⅳ区
7	須恵器	甕	(22.2)	–	(2.5)		ロクロナデ →横ナデ	ロクロナデ →横ナデ	回転実測	Ⅲ区
8	須恵器	壺	(21.2)	–	(8.6)		ロクロナデ→横ナデ	ロクロナデ→横ナデ	回転実測	Ⅲ区
9	土師器	小甕	–	7.3	(3.2)		ロクロナデ	ヘラケズリ 底部ヘラナデ	完全実測	No.1
10	土師器	小型甕	(11.8)	(6.0)	7.3		ロクロナデ→口縁横ナデ	ロクロナデ →下部ヘラケズリ	回転実測	カマド I区
11	土師器	小甕	(12.4)	–	(6.7)		ロクロナデ →口縁横ナデ	ロクロナデ →ド部ヘラケズリ	回転実測	I区
12	土師器	羽釜	21.7		(29.4)		ロクロナデ→ヘラナデ→口縁横ナデ	ロクロナデ→つば貼付→口縁横ナデ 胴下部ヘラケズリ	完全実測	I区 カマド

番号	種類	器種	法量(cm) 口径(径)	底径(幅)	器高(厚)	(g)	調整・文様 内面	外面	備考	出土位置
13	土師器	武蔵甕	(17.6)	–	(15.4)		ナデ→口縁横ナデ	胴部ヘラケズリ→口縁横ナデ	煤状炭化物	ⅥX2 カマド
14	土師器	武蔵甕	22.4	–	(10.4)		ナデ→口縁横ナデ	胴部ヘラケズリ・口縁横ナデ	煤状炭化物 口縁部一部欠損	ⅥX2 カマド
15	土師器	武蔵甕	–	4.9	(10.2)		ナデ	ヘラケズリ	煤状炭化物 口縁部一部欠損	ⅥX2 カマド

番号	種類	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	(g)	備考	出土位置
16	石製品	編物石	11.6	5.8	3.1	305.36	局所にスリ面あり 片面上部に敲打痕	Ⅱ区
17	石製品	編物石	10.5	6.3	3.6	499.17	局所にスリ面あり 正面の凹みは敲き痕？ 安山岩	カマド
18	土製品	羽口	(5.9)	(3.6)	(2.7)	(53.63)	上部鉄付着 外面ヘラケズリ	Ⅰ区
19	鉄製品	帯金具	3.5	2.7	0.1	3.77		ⅥX3
20	鉄製品	鉄鏃	9.2	3.1	1.5	27.93		ⅥX3
21	鉄製品	？	17.0	2.2	2.0	57.81		ⅥX3

第10表 H9号住居址出土遺物一覧表

（ ）残（ ）推定

番号	種類	器種	法量(cm) 口径(径)	底径(幅)	器高(厚)	(g)	調整・文様 内面	外面	備考	出土位置
1	須恵器	蓋	–	–	–		ロクロナデ 自然釉付着	ロクロナデ 自然釉付着	転本	Ⅰ区
2	土師器	坏	14.0	3.8	4.2		ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り	完全実測	Ⅰ区
3	土師器	坏	(12.6)	–	(5.0)		ミガキ・黒色処理	ロクロナデ	回転実測	Ⅰ区
4	土師器	坏	(13.9)	6.6	4.1		ミガキ→黒色処理	ロクロナデ・底部ヘラケズリ	完全実測	Ⅰ区
5	土師器	椀	–	8.4	(4.0)		ミガキ・黒色処理	ロクロナデ→切り離し後高台貼付 底裏「？」	完全実測	Ⅱ区
6	土師器 高土器	皿	(13.4)	–	(2.2)		ミガキ→黒色処理	ミガキ→黒色処理 高台貼付	回転実測	Ⅰ区

番号	種類	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	(g)	備考	出土位置
7	鉄製品	刀子	(11.1)	(1.4)	(1.0)	(15.36)		Ⅱ区

第11表 H10号住居址出土遺物一覧表

（ ）残（ ）推定

番号	種類	器種	法量(cm) 口径(径)	底径(幅)	器高(厚)	(g)	調整・文様 内面	外面	備考	出土位置
1	須恵器	蓋	(21.6)		5.0		ロクロナデ→ナデ	ロクロナデ・天井部ヘラケズリ→つまみ貼付	完全実測	No.3
2	須恵器	蓋	(20.6)	–	4.6		ロクロナデ・ナデ	ロクロナデ→ヘラケズリ→つまみ貼付	完全実測	No.5 Ⅳ区 検出
3	須恵器	高台坏	(12.0)	8.4	4.5		ロクロナデ→ナデ	ロクロナデ→切り離し後高台貼付	完全実測	No.6
4	須恵器	坏	(14.4)	8.2	4.6		ロクロナデ→ナデ	ロクロナデ・底部回転糸切り	完全実測	No.2
5	須恵器	坏	(14.2)	7.0	3.7		ロクロナデ→ナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り	完全実測	検出
6	須恵器	坏	(14.0)	(9.0)	3.5		ロクロナデ	ロクロナデ→ヘラケズリ	回転実測	Ⅲ区
7	土師器	武蔵甕	(18.4)		(8.5)		ナデ→口縁横ナデ	ロ縁横ナデ 胴部ヘラケズリ	回転実測	P 1
8	土師器	小甕	(11.8)	4.8	10.3		横ナデ→ヘラケズリ	横ナデ→ヘラケズリ	完全実測	Ⅰ・ⅣX
9	土師器	小甕	–	4.3	(5.3)		ロクロナデ	胴下部・底部ヘラケズリ	完全実測	No.4 カマド Ⅰ区

番号	種類	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	(g)	備考	出土位置
10	鉄製品	刀子	(12.3)	(1.5)	(1.6)	(14.91)		No.1

番号	種類	器種	法量(cm) 口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	(g)	調整・文様 内面	外面	備考	出土位置
11	土師器	甕	–	–	–	–	ナデ	ハケ目	拓本 粘土にウンモ「北野産」	Ⅲ区
12	瓦質	瓦	–	–	–		布目→ヘラナデ	タタキ	拓本	Ⅰ区

第12表 1111号住居址出土遺物一覧表

( ) 残 ( ) 推定

番号	種類	器種	法量(cm) 口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	(g)	調整・文様 内面	外面	備考	出土位置
1	須恵器	坏	14.0	7.4	3.7		ロクロナデ	ロクロナデ→底部ヘラナデ(ヘラケズリ)	完全実測	カマド
2	須恵器	坏	14.1	7.9	4.1		ロクロナデ	ロクロナデ・底部ヘラナデ	完全実測	Ⅱ区
3	土師器	武蔵甕	20.4	–	(8.5)		ナデ・口縁横ナデ	口縁横ナデ 胴部ヘラケズリ	図転実測	
4	土師器	武蔵甕	–	4.6	(5.6)		ナデ	ヘラケズリ	完全実測	カマド

番号	種類	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	(g)	備考
5	石製品	砥石	10.5	6.4	3.1	293.76	側面数6 正面に条痕(幅広)と線状痕(細い) 凝灰岩

第13表 土坑出土遺物一覧表

( ) 残 ( ) 推定

番号	種類	器種	法量(cm) 口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	(g)	調整・文様 内面	外面	備考	出土位置
1	須恵器	甕	(42.8)	–	(10.4)		ロクロナデ	ロクロナデ	図転実測	D 1

番号	種類	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	(g)	備考	出土位置
2	鉄製品	鏃	(13.4)	(3.6)	(0.7)	(21.64)		D 2 －No.1

第14表 M 1号溝址出土遺物一覧表

( ) 残 ( ) 推定

番号	種類	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	(g)	備考	出土位置
1	石製品	磨・敲石	(7.4)	(7.4)	(6.5)	(452.40)	下部欠損 上端部に敲打痕 正面・上側にすり面 火熱を受ける。 安山岩	

第15表 M 2号溝址出土遺物一覧表

( ) 残 ( ) 推定

番号	種類	器種	法量(cm) 口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	(g)	調整・文様 内面	外面	備考	出土位置
1	灰釉陶器	椀	–	7.1	(3.4)		ロクロナデ・ナデ→施釉	ロクロナデ→高台貼付・施釉	完全実測	
2	土師器	甕	(16.0)	–	(4.2)		口縁横ナデ	口縁ヨコナデ・胴部ヘラケズリ	図転実測	
3	十和田色土器	小坏	7.6	–	(3.3)		ミガキ・黒色処理	ミガキ→黒色処理	図転実測 内面に赤色塗料付着	

第16表 検出出土遺物一覧表

( ) 残 ( ) 推定

番号	種類	器種	法量(cm) 口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	(g)	調整・文様 内面	外面	備考	出土位置
1	土師器	坏	–	–	(1.4)		暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部糸切り 墨書	破片実測	検出
2	縄文	深鉢	–	–	–		ミガキ		拓本	検出

番号	種類	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	(g)	備考	出土位置
3	石製品	砥石	13.6	5.0	3.8	368.81	上下端部に顕著な敲打痕 正面に条痕 凝灰岩	検出
4	鉄製品	刀子	(15.0)	(1.6)	(0.4)	(19.06)		検出
5	青銅	古銭	1.9	1.9	0.1	1.76	「真観永宝」	検出

番号	種類	器種	法量(cm) 口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	(g)	調整・文様 内面	外面	備考	出土位置
6	瓦質	瓦	–	–			布目	ヘラナデ	拓本	検出

H1　完掘（南より）

H1　カマド完堀（南より）

H1　堀方（南より）

H2　完掘（南より）

H2　カマド完堀（東より）

H2　カマド堀方（東より）

H2　堀方（南より）

H3　完掘（南より）

図版二　H3～H6

H3　堀方（南より）

H4　完掘（南より）

H4　掘方、D2　完掘（南より）

H5　完掘（西より）

H5　堀方（西より）

H6　完掘（南より）

図版三　H6～H7

H6　カマド完掘（南より）

H6　カマド堀方（南より）

H6　堀方（南より）

H7　完掘（南より）

H7　カマド遺物出土状況（南より）

H7　カマド完掘（南より）

H7　カマド堀方①（南より）

H7　カマド堀方②（南より）

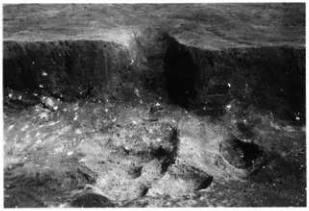
図版四　H7～H9

H7　堀方（南より）

H8　完掘（南より）

H8　金具出土状況（南より）

H8　カマド完掘（南より）


H8　カマド堀方（南より）

H8　堀方（南より）

H9　完掘（南より）

H9　堀方（南より）

図版五　H10～H11

H10　完掘（南より）

H10　カマド完掘（南より）

H10　カマド堀方（東より）

H10　堀方（西より）

H11　完掘（西より）

H11　カマド完掘（西より）

H11　カマド堀方（西より）

H11　堀方（西より）

図版六　H12・竪穴状遺構・D1・M1

H12　完掘（南より）

H12　堰方（南より）

Ta1　完掘（南より）

Ta2　完掘（南より）

D1　完掘（西より）

M1　完掘（南より）

図版七　M2・M3・A～C地点全景

M2　完掘（南より）

M3　完掘（南より）

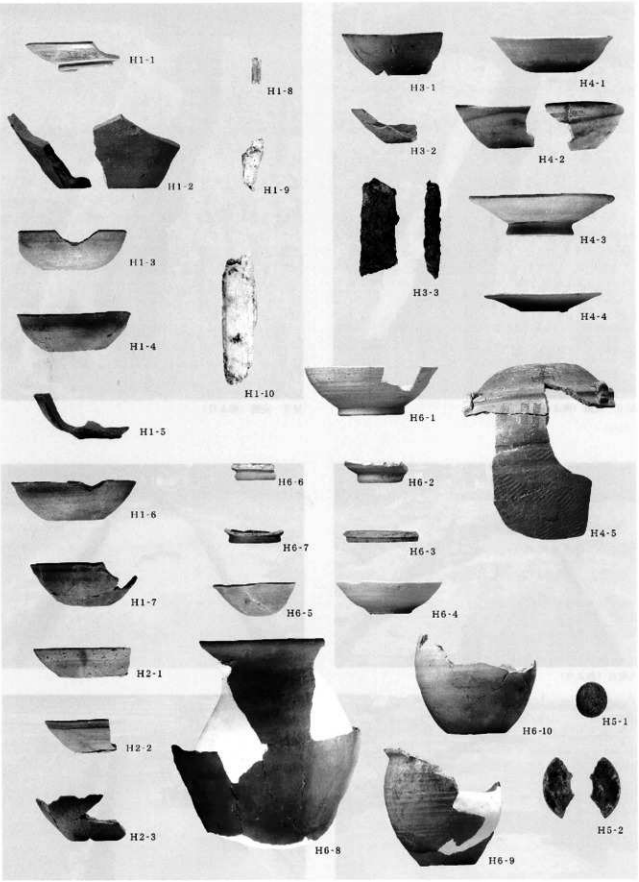
A地点（西より）

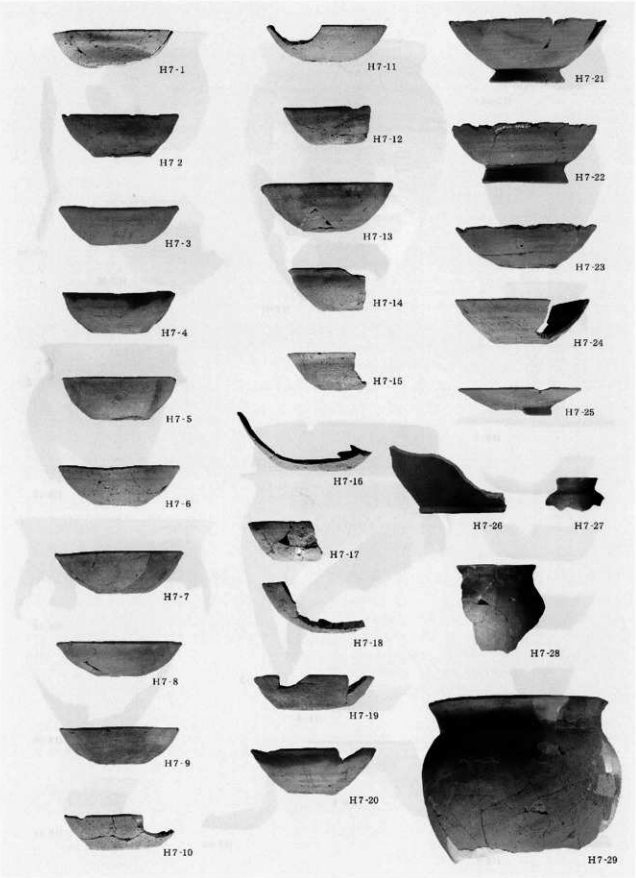
B地点（西より）

C地点（北より）

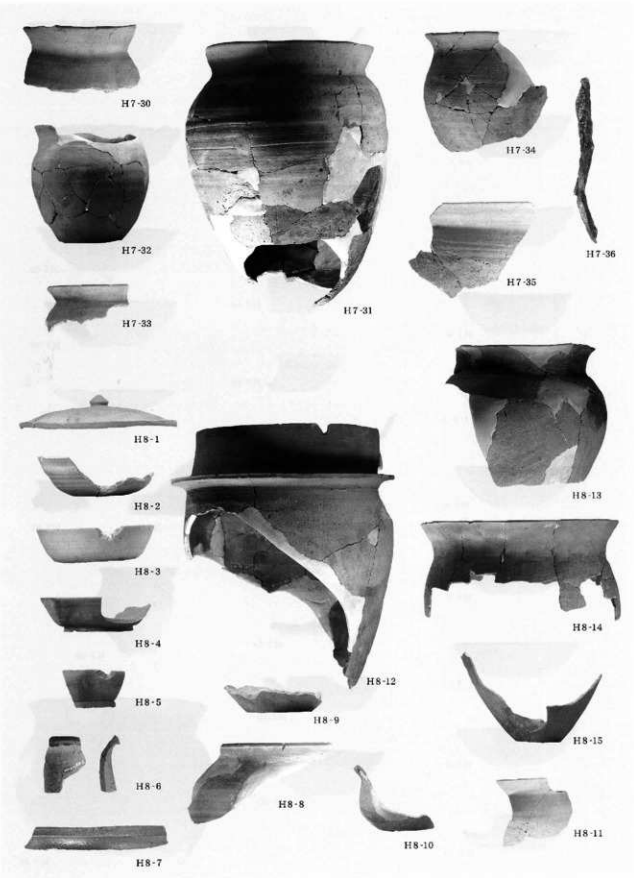
C地点南（西より）

図版八　H1～H6

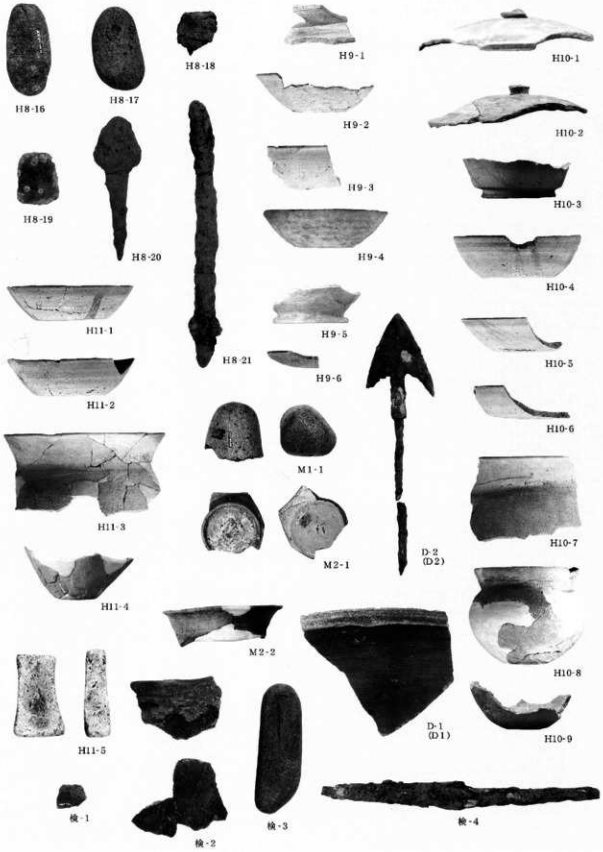

H1-1
H1-2
H1-3
H1-4
H1-5
H1-6
H1-7
H1-8
H1-9
H1-10
H2-1
H2-2
H2-3
H3-1
H3-2
H3-3
H4-1
H4-2
H4-3
H4-4
H4-5
H5-1
H5-2
H6-1
H6-2
H6-3
H6-4
H6-5
H6-6
H6-7
H6-8
H6-9
H6-10


H7-1
H7-2
H7-3
H7-4
H7-5
H7-6
H7-7
H7-8
H7-9
H7-10
H7-11
H7-12
H7-13
H7-14
H7-15
H7-16
H7-17
H7-18
H7-19
H7-20
H7-21
H7-22
H7-23
H7-24
H7-25
H7-26
H7-27
H7-28
H7-29

図版十　H7・H8


H7-30
H7-32
H7-33
H7-31
H7-34
H7-35
H7-36
H8-1
H8-2
H8-3
H8-4
H8-5
H8-6
H8-7
H8-12
H8-9
H8-8
H8-10
H8-13
H8-14
H8-15
H8-11

図版十一　H8～H11・D・M・検出



佐久市埋蔵文化財調査報告書　第193集
周防畑遺跡群　南下北原遺跡
－長野県佐久市長土呂南下北原遺跡発掘調査報告書－

２０１１年３月

編集・発行　佐久市教育委員会
〒３８５－８５０１
長野県佐久市中込３０５６

文化財課
〒３８５－０００６
長野県佐久市志賀５９５３
℡０２６７－６８－７３２１
印　刷　所　キクハライング有限会社

報告書抄録

書名	南下北原遺跡
ふりがな	みなみしもきたはらいせき
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第193集
編著者名	森泉かよ子
編集・発行機関	佐久市教育委員会文化財課
発行年月日	2011．3．15
郵便番号	385－0006
住所	長野県佐久市志賀5953
遺跡名	周防畑遺跡群　南下北原遺跡（略号NMK）
遺跡所在地	長野県佐久市長土呂南下北原996－1　他
遺跡番号	7
経度	138°27′54
緯度	36°17′14″
調査期間	2009．08．06～08．26（現場）
調査面積	1，296㎡
調査原因	宅地造成事業
種別	集落址
主な時代	奈良・平安
遺跡の概要	集落址－奈良－竪穴住居址3－土師器＋須恵器＋鉄製品＋青銅品 ＋羽口＋編物石 －平安－竪穴住居址－土師器＋須恵器＋灰釉陶器＋鉄製品 ＋皇朝十二銭「貞観永寶」＋布目瓦
特記事項	「刑部仁丸」墨書土器・皇朝十二銭「貞観永寶」・布目瓦